

名 称	二本松市安達体験活動・ボランティア活動 支援センター
所在地	〒969-1404 福島県二本松市油井字濡石3番地1
連絡先	TEL : 0243-23-3721 FAX : 0243-23-8203 URL : http://www.city.nihonmatsu.lg.jp/index-1.html (二本松市HP)

地域の現況・特色

活動対象地域の人口 旧安達町 11,684人

旧安達町は福島県中通り北部に位置し、高村光太郎の詩集「智恵子抄」で知られる高村智恵子の故郷で、「あれが阿多多羅山、あの光るのが阿武隈川…」と詠まれた通り、安達太良や阿武隈の山並みに囲まれた豊かな自然に恵まれた町である。また、東北自動車道や国道4号線が通る交通利便性の高さを生かした、農業・商業・工業が一体となった町でもある。

町内には四つの小学校と一つの中学校があり、小中はもとより、公民館を中心とした社会教育分野との連携を生かした教育が進められ、平成16年度に完成した文化ホールの活用も積極的に行われている。また教育委員会では毎年「智恵子のふるさと小学生紙絵コンクール」を開催し、県内各地よりたくさんの応募がある。

平成17年12月1日、周辺3市町との合併により二本松市となったが、旧町の特徴を継承しながら、新市一体となり「ほんとうの空」のある活力あふれる地域づくりを現在も進めている。

コーディネートした事例の名称、概要、特色

名称 「安達わんぱく村チャレンジ教室」

1 事業の概要

安達わんぱく村チャレンジ教室は、30年の歴史を持つ安達公民館主催の小学生対象の宿泊体験活動であり、地域の青少年教育活動として定着している。

本事業は、学校の夏季休業中に2泊3日の日程で実施され、毎年40～50人の小学生の参加がある。また高校生が活動補助としてボランティア参加することも恒例となっており、毎回5人程度の参加がある。その中には小学生の時に参加したという高校生も少なくなく、自分たちが体験した活動を思い起こしながら小学生の活動を助ける姿が見られる。

開始当初は、町内の体育施設（グラウンド、体育館）を利用したキャンプ体験を行っていたが、福島県内の青少年社会教育施設の充実もあり、回を重ねるにつれ「福島県民の森」

や財団法人福島県自然の家の施設を利用した事業へと変化してきた。

平成17年度は町内4小学校第4学年以上の児童を対象とし、8月10日から2泊3日の日程で、福島県自然の家4施設の一つ、「相馬海浜自然の家」を会場に実施した。

2 活動のねらい

- (1) 自然に親しみ、自然を大切にする。
- (2) 集団宿泊生活を行い、規律、協同、友愛、奉仕の仕方を学ぶ。
- (3) 野外活動を通して、心身を鍛える。

3 活動内容としては、見学学習（火力発電所見学）、野外炊飯、キャンプファイヤー、海水浴、ボディボード体験、いかだ・カヌー体験、星座観察、海岸清掃、バーベキュー大会などであるが、互いに協力しながら活動し、交流の輪を広めることができた。また、小学生1グループに一人の高校生ボランティアを配置することができ、参加小学生とボランティア高校生の交流も随所に見られた。

コーディネートの実際

1 ボランティア活用のねらい

「二本松市安達体験活動・ボランティア活動支援センター」の事務局は安達公民館に置かれ、本事業「安達わんぱく村チャレンジ教室」も安達公民館主催事業であることから、ねらいを共有したコーディネートを意識しながら活動に取り組んできた。

「安達わんぱく村チャレンジ教室」は、参加小学生達の体験の機会を充実させることが大きな目的であるが、高校生の兄・姉に当たる年代との交流を通して、子どもたちが異年齢の仲間と遊んだり地域の人たちと関わったりすることができるようにすることも目的の一つである。

また、ボランティアとして参加する高校生たちにも、社会に何らかの関わりを持ったり貢献したりすることを通して、自らの心を豊かにしようとするボランティア精神の涵養と、地域におけるボランティア活動の広がりを目指すことができるように働きかけていくものとする。

2 コーディネートするまで

青少年にボランティア活動の場を提供することもこの事業の大きなねらいだったので、いかに高校生の参加を促すかが、コーディネーターとしての力量が求められた。

二本松市安達体験活動・ボランティア活動支援センターには学習ボランティアとして50を超える個人、団体が登録しているが、本事業の活動内容である自然体験活動やレクリエーション的活動を主な担当領域としている登録者は少ない。さらに、本事業で考えている高校生年代の登録者がいない。昨年度協力を得たボランティアは、進学や就職をしており今年度の対象とはしなかったことから、募集はゼロからのスタートであった。

今年度の「安達わんぱく村チャレンジ教室」のボランティアを募集するに当たり、まず実施したことは、参加小学生の兄・姉やその友人をターゲットに、参加者募集のチラシに「ボランティア募集」を記載したことと、回覧板による「ボランティア募集」のチラシを配布したことである。しかしこの時点での応募は1人のみであった。

そこで、地域で高校生を含めた活動を行っているサークルを訪れ、個別にボランティア参加をお願いしたところ、その友人も集まり、ようやく5人の高校生ボランティアを確保するに至った。

3 本事業におけるボランティア活動の具体的場面

- (1) 事前研修会でのグループ編成や活動内容へのアドバイス。
- (2) 研修先への往復途上での引率。
- (3) 海水浴やカヌー・いかだ遊びの活動支援。
- (4) オリエンテーリング等、野外活動における活動支援。
- (5) キャンプファイヤーの準備、運営。
- (6) 野外炊飯活動を含む食事の世話。
- (7) 入浴や就寝時の世話。

4 活動の実際

(1) 事前研修会（顔合わせ会）

- ① アイス・ブレイキング……参加者が緊張を解きほぐすことができるゲームの実施。
- ② グループ編成、日程説明…各グループ高校生を配置し、活動内容の徹底を図る。
- ③ グループ旗作成……グループの一体感と宿泊研修への意欲付けを図る。

(2) 2泊3日の宿泊研修

(3) 感想文集の発行

参加小学生だけでなく参加ボランティアにも感想を書いてもらい、今後、自主的な活動が実践できるようにする。

5 成果

- (1) 今年度の参加者の中にも小学生の時に本事業に参加した子がおり、親身になった活動の支援が見られた。海での活動が中心となり、引率職員だけでは目が十分届かないところや、職員とは違った視点での活動をサポートすることができた。
- (2) 引率職員との関わりとは違う小学生たちとの交流が見られたことは、少子化・核家族化や地域のつながりの希薄化と言われる今日において、どちらにとっても貴重な体験活動であった。
- (3) ボランティアとして参加した高校生たちは、いわば「教える側」の立場にあったが、感想からは、小学生たちから逆に教えられたことがあったという意見もあり、交流の幅が広がった。

6 課題

- (1) 町内4小学校の規模の違いから、参加者の学校別割合にも偏りが出てしまう。そのことを考慮したグループ編成をしたが、活動内容によっては同じ学校・学級の仲間と集まってしまうこともあった。
- (2) 時間的にゆとりのあるプログラム編成をしたつもりであったが、実際に活動してみると次から次へと動かなければならない場面があり、参加者がとまどってしまうこともあった。
- (3) ボランティアとして参加した高校生たちが全員揃ったのが、事前研修会の時であり、それ以前にはそれぞれの部活動等もあり、本事業の活動内容の周知を十分行うことができなかった。事前研修会及び実際の活動日程の中で、参加した高校生たちが主体的に活

動したことで小学生へのサポートができたが、わずかな時間でも高校生ボランティアたちとの打合せの時間を設けることで、より充実した活動ができるようにしたい。

- (4) 本事業には毎年高校生たちがボランティアとして参加しているが、ボランティア活動がそれだけにとどまってしまっている。他事業への参加や、地域での自主的な取組みを促すことができるコーディネートの在り方や、学校などとの一層の連携を考慮に入れた活動の広がりを目指したい。

7 次回の取組みへの改善点・留意点

- (1) 今回の事例の場合を含め、センターへの学習ボランティア登録者を活用する場合、ボランティア活動を行いたい側と受けたい側とのニーズがマッチングしない事例が多い。活動内容はもちろん、活動日や時間帯についても双方の細かい調整が必要であることを感じている。
- (2) 今回の事例を通して、ボランティアを募る際、最も有効だったことは、地域住民のいわゆる「ロコミ」である。地域にはたくさんの人材が眠っていると思うので、今後このロコミをネットワーク化することで、次回以降の事業へのボランティアの参加を促進させたい。



キャンプファイヤー



野外炊飯

執筆者職・氏名：二本松市安達公民館社会教育主事 平久井 淳